



発行
KOA 森林塾
(事務局)
0265-70-7065
編集 早川 清志
題字 島崎 洋路

通年コース第十五・十六回開催報告

「炭焼き・保科山林見学」

『辛抱の末、50kg余のヒノキ炭』

冬の寒い朝、スイッチを押せばエアコンが運転し始め、あるいはファンヒーターに点火すれば温かい空気を送り出してくれますが、60年ほど前の、昭和30年代あたりまでは暖房のメインは炬燵(こたつ)でした。燃料は豆炭などの石炭由来のものもありましたが、ほとんどは炭で、当時、日本全国で年間2000万トンを超える生産量がありました。伊那谷各地の山村でも、田畑の仕事が終わった

晩秋から春先まで、山の中に築いた炭窯でコナラやクヌギなどの広葉樹を焼いていました。

昭和初期、大学初任給が1万円のころ、炭1俵15kg入りで380円という記録が残っています。50俵窯で月に4回炭焼きをすれば、売り上げは7万6000円ですから、山村の現金収入としてはとても割の良い仕事だったことがうかがえます。もっとも切ったり、割ったり、運ん

だりはほとんど人力であつたと思われ、大変な重労働ではあつたのですが。

戦後、化石燃料の輸入が増えるにしたがつて、暖房や煮炊きは灯油やガスや電気に取って代われ、炭の生産量は漸減しています。

2012年の全国の炭の生産量は1万2000トン程度で、料理屋さんや居酒屋さんなどでの需要はあるものの、東南アジアや中国からの安価な輸入炭に押されて、良質で差別化したものを作らない限り、生業として続けるには難しいようです。それでも全国で3000人余の方が国産炭の生産

に携わっております。

炭はカーボンニュートラルな燃料でもありますが、炭を使うことは里山の整備にもつながります。姿かたちが美しく、不完全燃焼しないお茶炭は、残していつてほしい日本の文化でもあります。脱臭や空気浄化、水質浄化や家屋の湿度調節、土壌改良など、炭の機能が見直されている昨今、炭焼きの技術も継承されなければ、と思います。

さて今回は伊那市富郷の金鳳寺さんで間伐したヒノキをもらつて炭にしてみました。前号通信でご紹介した、百年物の天然ヒノキ、56.5kgが炭材です。昼の12時20分に「研ぎマイスター」牛山さんが点火。順調に火が回り、5時10分には上蓋を閉めたのですが、そこからが長い。鍋をつついて一杯やっつけているうちに冷たい強風も吹いてきて、しかも密封も不完全であつたのか、なかなか全体に熱が回りません。交代で仮眠して、結局窯止めは朝の9時。保科山林見学に出発する直前でした。窯止めまでに要した時間は20時間40分。森林塾史上最長で、ゲットした貴重な天然ヒノキ炭は54.5kgでした。収炭率が9.8%で、結果オーライかな。



樹冠率が50%近くに保たれている

窯止めの後すぐに、保科先生の案内によるカラマツ林見学です。長野県は戦後のカラマツ植林の先進地であり、県内で生産されたカラマツの苗は、全県で人工林の半分以上である、24万ヘクタールに植えられ、さらに北海道にわたって別巻辺牛川上流の1万ヘクタールを超えるパイロット

も、ここまでのびのび育てられていたカラマツ林はそうは有りません。保科先生の間伐における座右の銘は「迷ったら切れ!!」大胆にして細心な間伐法を貫いて半世紀です。

というところで、保科山林には全国各地から、林業関係者の方々が見学に訪れています。日本広し、といえども、ここまでのびのび育てられていたカラマツ林はそうは有りません。保科先生の



レアもできたがウェルダンも54.5キロ



12時20分、マイスター牛山による点火



煙道の周りに炭材をびっしり詰める



粗朶で作った太巻きは煙道となる

通年コース第15・16回
12月12・13日(金・土)
炭焼き・保科山林見学
参加者/牛山さん、金井さん、小池さん、立木さん、日戸さん
スタッフ/早川

専門コース第4回開催報告

『自分の癖を知り精度を上げる』

なくて七癖、という慣用句があります。たとえば車の運転。センターライン近くを走る人、路肩ぎりぎりに寄る人。車間をつめて走り、頻繁にブレーキを踏んでいる人。車間を空けすぎで、しよっちゅう前に割り込まれる人、それぞれです。チェーンソーによる伐倒もオープンスタンス、クロー



初めてにしては上出来です K O Aマークのヘルメット

スドスタンス、前かがみ、立ち膝等、いろいろのパターンがありますが、まず基本をしつかりおさえた上で、ご自分に合う姿勢を探して

いただけばよいと思えます。そして、バーが向こう下がりになり勝ちだとか、受け口が常にとどちらか方向に偏ったりなどという、困った癖に気が付けば、徐々に矯正していかればよいと思います。安全に確実に立ち木を倒す道は、ひとつではなく何通りもあります。ご自分に合った、無理のないパターンを見つけていただければ幸いです。

専門コース第4回開催
11月28・29日(金・土)
参加者/江崎さん、水津さん、原さん、八木さん、山本さん
スタッフ/川島、早川

専門コース特別講習
12月17日(水)
参加者/池田さん、早川

次回の予定
通年コース第17・18回
3月6・7日(金・土)
間伐の復習(6日)・きのこ菌うちと修了式(7日)
今年度の最終回です。

リレー通信
自己紹介&決意表明
平澤 健

初めまして。今秋、K O A 森林塾の集中コースに参加させていただいた平澤と申します。

私は生まれも育ちも信州飯田。父も母も飯田市生まれという生粋の信州人です。しかも生まれより四十数年、飯田から外に出て暮らした事がないという「井の中の蛙」でもあります。しかし長く住んでいる分、この郷里に親しみをもち、良さを知っているつもりです。

今回この通信に寄稿させて頂くにあたり、参加する事になったきっかけとこれから考えている事について記させていただきます。

私の住む飯田市は南北に天竜川が流れ、多くの支流が流れ込むと共に、中央・南アルプスに至る山々が連なるという起伏の多い土地ながら、その標高の違いや気温の変化、日照時間の長さから様々な作物が収穫できる豊



かな土地であり、我が家もわずかではあります水田や畑、また山林からもたらされる様々な自然の恵みを享受しています。しかしその生活の有難さを感じられるようになったのはつい最近のこと。

私は地元の高校を卒業後、高校で学んだ土木技術を活かす技師として市役所にお世話になる事ができました。携わってきた業務としては市が管理する道路や河川のほか、個人や団体が管理する農道や用水路、水田のほ場整備などの道路や農業施設の新設と改修に、下水道の施設整備や公園の管理、街路樹の維持など生活に必要な様々なインフラの整備と維持管理を担当し、森林や里山とは全く縁のない日々が続いていました。

大きな転機となったのは4年前に「林務課」に異動となつてから。人事の内示が出た時は、自己には、自

分は、自
てつき
りこれ
までの
ように
土木技
師とし
て林道
の整備
に携わ

るかと思いきや、担当したの
は森林整備や里山整備、また
里山に出没する野生鳥獣への
対策というこれまで全く
経験したことのない新たな
分野でした。

これまででは決められた道
路構造令といった規格や基
準に沿って施設を整備して
維持管理していればよかつ
たのですが、対象となる森林
や里山は同じように見えて
所有者それぞれの意向や過
去の利用の経過など人為的
な要因の他に、土壌や日当た
りなどの自然環境の違いか
ら、生えている木々の種類も
大きさも異なっていました。
また、木材として利用するた
めに育成しているかと思え
ば、保安林のように土砂災害
の防止や水源のかん養とい
った森林の持つ能力を活か
したり、林産物のキノコや
山菜を採取するなど、目的や
用途に応じた森林や里山の
姿があり、一概に「どうすれ
ば正しい」といった答えのな
いものでした。

最初の一年はとにかく戸
惑いの連続。「人工林」と「天
然林」の違いから始まって、
「間伐とは単に三割抜き伐り
をすること?」「除伐って間
伐とは違うの?」「下刈りは
単に草を刈るんじゃないの?」など誤った認識から森
林組合の担当者などを戸惑
わせた事も(苦笑)。

出た時
には、自
分は、自
てつき
りこれ
までの
ように
土木技
師とし
て林道
の整備
に携わ

徐々に業務に慣れ、様々な
場所の森林を見るにつれて
思い出したのは所有する山
林。過去に父に連れられ一緒
に自宅の新風呂用の丸太を
搬出した事はあるものの、当
時は興味もなくなぜ苦勞し
てこんな事をするのか全く
理解できずにいました。

実に二十数年振りに記憶
を頼りにその場所に行つて
みると、今まで見たこと
のない山林の状態に絶句。谷
間に縦に伸びるその山林は
元々が棚田であり、下部には
杉を植えたようなのですが、
杉の大半には藤蔓が巻き付
き、立っているものがあれば
まだまし。酷いものは藤のほ
うが太く、絞め殺され立ち枯
れているもの、倒れて腐つて
いるものばかり。間伐が必要
とか遅れているといった以
前の問題で「人工林」として
成立していない。その場所を
抜けた左右の山腹は元々ア
カマツが生える場所だった
のでしょうか、すでにアカマ
ツの多くは枯れ、その処理と
して燻蒸した丸太の跡の上
にはぼろぼろのビニールと
青い薬品の入っていた容器
が転がっており、その合間に
後から生えてきた広葉樹(細
い)とそれに巻き付く藤蔓。
数少ない平坦な場所は元々
が水田であったために、いた
るところが泥濘化し長靴で
ないと歩けず湿地化し、高木

分は、自
てつき
りこれ
までの
ように
土木技
師とし
て林道
の整備
に携わ

分は、自
てつき
りこれ
までの
ように
土木技
師とし
て林道
の整備
に携わ

は見当たらない。ようやく見つけたあぜ道の跡も崩落や流れの変わった水路によっていたる所で寸断されており、もはや過去の棚田を想像するのも難しい「惨状」ともいえる光景。

市内の様々な山林を見てきましたが、ここまで荒れた状態という山林を見たのは初めて。もっとも今思えば「荒れた」というよりは自然の遷移の中の一段階とも言えますが、使う事を考えたらそれは酷い状態でした。

呆然と立ち尽くしていましたが、まずは藤蔓に巻き付かれ、見上げても藤の葉ばかりで地表に光が届かない状態と少しでも巻き付かれた木をなんとかしたいとの思いから、細いものは鉈で、蔓とは呼べぬほど太いものは、のこぎりで伐る(笑)事から始めました。そんな作業を冬場に行い、季節が変わった頃に訪れると、今までまったく生えていなかった場所に見慣れぬ植物の芽生えや、様々な葉の形状をした木々に気がきます。また明らかに人ではなく、動物が行き交った跡である獣道の存在や糞などの痕跡も見えるようになりました。

ほんの少し手を加えただけなのに、大きく様変わりし全く違う場所に見えるようになる。この変化に驚くと共に、喜びを感じるようになり、立ち入る事ができる森林ではその森林の状態から以前の姿やこれから将来の姿を想像し、これからのように森林を管理していくべきなのか深く考えるようになりました。

こうした中、もっと森林の事を知り多くの人に伝えていきたいとの思いから昨年「森林インストラクター」の試験に挑戦するうちに、いくらか知識を得ていても実際に体験していないと生きた言葉として発せられないう事に気づきました。(単に試験にて自信のあった「森林」と「林業」の二科目に落第した事も一因ですが)森林は様々な機能を持っていますが、人間の生活に一番身近に言えば木を木材として利用する事であり、そのため必要となるのは木を伐る技術。これを体験し理解をしていなければと思うものの、

実際に体験できる場というのは少なく、検索し辿り着いたのが森林塾でした。木を伐る事は塩尻の県林業センターにおいて学んだ伐木造材の講習や、市内の新ストープューザの有志にて組織された薪集めの団体「薪人」(まきびと)などで僅かに経験はありましたが、実際に人工林にて伐倒を体験できるだけで

なく、何故この木を伐る(間伐する)必要があるのかを学ぶことができるのはこの森林塾だけ。三日間という限られた時間でしたが、講師のお二人や島崎先生からの言葉は、印象深いものばかりであり、それが実体験の中で感じ考えられた事は大いに経験となりました。また、一緒に参加した、住む場所も世代も異なる受講生との会話からは多くの刺激を受けました。

本当に内容の濃い三日間を経て森林インストラクターの二次試験に臨めたのと共に、これからの森林と人との関わりについて考え、思うのは「森林は放置しても遷移でゆっくりと自然に天然林へと移っていくものの、それは森林の遷移の中で百年以上の長い時間の中であり、人間が森林の価値を実感するにはある程度の利用が必要」ではないかということ。その利用についてはこれまでのように木材を生産する人工林に経済性も必要であるものの、「人間が定期的

に木々を使いつつも、多様な生物が生息できる森を育て、多くの人に見てもらおう事が森林の持つ人への目に見える恩恵を活かし理解してもらえぬ事に繋がる」のではな

いかと思っています。ただ、「言うは易し」。それを

を実際に目にし体験し、考えてもらわない事には伝わらないため、森林インストラクターとなれたあかつきには、「森林生態系を崩さぬ利用」について追及し実体験を通じて理解してもらえような場を提供できるような、更なる学習と体験だけでなく、自らの実践が必要だと感じています。最後にこの通信をお読みの皆さんが様々な立場で森に関わり、健康でご活躍されることを祈願しています。



野生動物と共に 都筑 綾花

リレー通信



「好きなことを書いていいです。骨のこともいいですよ」と早川さんからリレー通信の事を聞き、よし、それならと原稿を書きました。

なぜ骨なのかは、またなぜ林業を学ぼうと思ったのか、私の自己紹介で綴ります。私は、東京の江戸川区にある専門学校「東京コミュニケーションアート専門学校」で「野生動物保護専攻」という、都会とは縁のなさそうな名前の専攻に所属しています。ここの専攻は皆それぞれ自分の得意な分野を持ち、植物が得意な人、鳥が得意な人、哺乳類が得意な人。そして私が得意なのはフィールドサイン・解剖・骨。一般の人から見たらおそらくあまり関わりたくないような人種と自負しています。事実、専攻仲間からは「骨女」「スカベンジャー」「変人部」と呼ばれ…。でも、なぜ骨であるか、ちゃんと理由があるのです。

もともと私は小学校二年生まで長野県で暮らし、今は神奈川県の大磯町という山と海が側にいる田舎町に住んでいます。自然豊かな場所で育ったおかげが、高校を卒業した後は「日本の野生動物」を保護

していきたくらいと思い、大学よりも実習の多い専門学校を選びました。実は、野生動物保護という専攻名ですが、ほとんど実習では野生哺乳類は見ることは出来ません。経験不足から見つけることが出来ない、が理由として挙げられますが、実際は向こうが私たちを先に見つけて、さっさと隠れてしまいうからです。ですが、初めての海鴨の骨を拾い、それを機に次は子ジカの骨をいくつかと、タヌキの全身骨格等拾ったり、ジビエとして出されたクマの肋骨を頂いたり。なぜ、私が骨を集めているのかといいますと、そこに暮らしていた生き物の生態や身体をつくりを知る事が出来るからです。

わかりやすい例として、二ホンジカやカモシカの角はどこから生えているのでしょうか。答えは頭のとっぺん。ですが、正確に言うところ頭骨という部分から生え、人間でいうと「おでこ」にあたる部分です。また、人間やサルの間には鎖骨があり、すがイヌやウマ、ウシ、シカ、イノシシなどの動物にはありません。(ネコは小さくありますがどこにも繋がっていません)ちよっと試しにパン

ザイしたり、腕を後ろに回したり、前後左右の動きをして

みて下さい。問題なくできますね？ですが、飼っているイヌやネコにそんなことしたら怒りを買うのは必須。彼らは「走る」四足動物なので前後の動きしか出来ません。鎖骨は肩甲骨と接し、手で物を持ったり、登ったりするのに必要なバランスをとるのには必要ですが、「走る」動作にはあまり必要がないのです。

ほかに書きたいことが山のようにあるのですが、多分ウンザリするくらい長くなるかと思うのでとりあえずはここまで。

骨好きの私になぜ、林業を目指し出したのかというと、それは二年になって進路を考えだした時の事でした。はじめはインターブリーターやエコツアーガイド、野生動物の保護施設職員など考えていました。林業は東京で開催された「森林の仕事ガイダンス」に専攻仲間と参加しましたが、「こういう仕事もあるのね」位の認識で、この時はまだ進路の選択肢に入ってはいませんでした。

二年になって神奈川県丹沢山地に、実習としていくようになった時のことです。私はシカによる食害の状況を調査しに登山しましたが、山のあちこちでスズタケは枯れ、土砂が崩れ根

は剥き出し、落葉樹・針葉樹ともに折れている様子を目の当たりにし、想像以上だったのを覚えています。それまで山の状況に、きちんと目に向いていない自分がいたことに気が付いたので。

そこから急展開でした。もし、インターブリーターやエコツアーガイドになったとして、山の成り立ちも、植物たちの育ち方も、そこに暮らす野生動物のこともその目で見てきた訳でもないのに、誰かに伝えていいのだろうか。クロモジは良い香りがあります。でも私はクロモジがどうやって育っていくか知りません。林の中にカケスの羽が落ちていた。でも私はカケスという鳥を知っていても、実際に見続けてきた訳ではありません。野生動物たちが暮らす森を、知らずして伝えてはいけないと思ったのです。まず自分自身が変わらな

いと思えました。そして、9月に長野県・塩尻で開催された林業の合同企業説明会に単身乗り込みました。そこでKOA森林塾のインストラクターを務める川島さんと出会い、企業研修を受け、なんと飛び入りで森林塾の参加をさせていただきました。実際にチェーンソーを使い、測樹した林を切り進んでいくと、それまで声

しか聞こえていなかったシジュウカラやヤマガラスが姿を見せ、林の中を飛び回っている様子には感動したのを覚えています。ああ、もっと書きたいことがたくさんあるのですが、もうすぐ二千字を超えてしまおうようです。もし、「都筑」の「続き」が気になるようでしたら、「骨・野生動物」話を餌にぜひ話しかけてください！それでは。



コラム

「島さんの『森林・林業白書』を読む」

林業活動の近況(つつき)

前稿の『誰が』が定かでない、これからの森林の維持・管理や林業活動を、『いつ、どこで、どうするのか』の策定も極めて容易でない。一方、おしなべて生育が優れており、蓄積量も充実の度合いを高めたところある我が国の森林群は、その取り扱いによって様々な公益的機能を果たしながら、必要

にして十分な木材をはじめとする林産物の供給も図り得る素地を保有してきている。こうしたミスマッチを効率よく解きほぐしていく行為が林業技術であり、その実践が林業活動であるという理解される。

従って現代の関係者が果たすべきは、白書の各所に記述されているように、大幅に手後れている人工林の手入れ(主として間伐)をできるだけ早期に推進して、恵まれた森林群の健全化を図ることが強く求められている。しかし複雑多岐にわたる地形・地質を抱え、格段に低位な林内路網密度(1ha当たり平均の林道の延長、ドイツでは118m、我が国と同様に国土が急峻なオーストリアでも90mであるのに、我が国ではわずか19mに過ぎない)のもとでは林内の出入りさえはばかられる一方、急速に成熟度を増し始めた森林蓄積を対象に、木材の自給率を大幅に高められる体制は整いつつあるが、伐出コスト低減

の限界性も顕在化し、林業活動に様々な障壁が生じてきている。最近の白書ではこれらの事象と並んで「森林の多面的機能と我が国の森林整備」(26年版第 1 章、第 1 節)には、水源涵養機能、山地災害防止・土壌保全機能、快適環境形成機能、保健・レクリエーション機能、文化機能、生物多様性保全機能、地球環境保全機能、木材等生産機能を挙げ、それぞれの機能に対する具体的な整備のあり方も述べられている。

また、第 1 章では「東日本大震災からの復興」を取り上げ、復興に向けた森林・林業・木材産業の取組や原子力災害からの復興などへの対応が述べられており、第 2 章には「我が国の森林と国際的取組」について、我が国の森林の整備・保全に関わる基本方針と整備・保全の動向、国民参加の森林づくりと国民的理解の促進等のほか、世界的に持続可能な森林整備の推進(2010年の世界森林資源評価によると世界の森林面積は40億3000万haで、陸地総面積の31%を占めているが、2010年までの10年間に、植林等による増加分を差し引いても年平均で521万ha減少している)、地球温暖化対策、我が国の国際協力の動向等についても記述されている。

これらこの事柄については何れも現代社会に照らして欠くことのできない課題ではあるが、ただでさえ我が国の森林の維持・管理や林業活動にあえいでいる関係者にとつてはどこまで踏み込めるか危惧の念を拭い去ることができない。林野当局も言うように、当面の10年間ほどを費やして、放置できない懸案事項は総て解消し得るような、徹底した背策の断行を求めたい。

おわりに

本当に一年の過ぎるのは早いもので、師走も残りわずか。「門松は…」と詠んだ一休さんじゃないけど、お正月は来て欲しいような、欲しくないような。ご馳走食べてお屠蘇をいただいて、家族とぼんやりテレビを眺めているのも悪くはありませんが、健康診断での要注意項目がこれ以上増えませんかよつに。

島崎 洋路

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望は事務局まで。TEL 0265-70-706 FAX 0265-70-799 E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp sh-sakano@koanet.co.jp 携帯:090-4463-0062(開催日) URL http://www.koanet.co.jp

